

3年たって思うこと

法律事務所で働き始めて早3年。

毎日がめまぐるしく過ぎ、あっという間の3年間だった。

今年度より受付業務から外回りの仕事になり、先輩方から学ぶ毎日である。

法律事務所職員

畑田 真希子

日々気をつけていること

私の事務所の事務局業務は「受付」「外回り」「会計」と3つにわかれている。私は入所から3年間「受付」の仕事をしてきた。

私の事務所の受付は、電話対応、接客、郵便物整理、FAX整理などがある。

朝一、私の仕事は郵便物整理から始まる。私の事務所は受信簿に1つ1つ郵便物を記録する。特に特別送達には細心の注意を払う。間違いなく弁護士に渡さなければならない。

FAXの処理は、誰の件で、何処から届いたのか、外出している弁護士には連絡簿に記録した上、弁護士別のポストに納め、在室している弁護士には手渡しをしている。特に気をつけなければならないのが、期日当日に相手方から届く書面や書証である。在室の弁護士にはすぐ渡せるが、弁護士の携帯は役に立たないことが多く、外出している弁護士に届いていることを伝えるのが一苦勞である。特に労働事件の書面は、届いた瞬間に弁護士に連絡をするなど常に注意している。

電話対応での苦勞

電話は一日鳴りっぱなしの日もある程多く、電話対応は特に重要である。始めは裁判所の電話がとても苦手だった。法学部出身ではない私にとって、擬制陳述だの事件番号だの、初めて聞く言葉が沢山あるうえ、書記官の言葉は流れるように早く、聞き取れない。もう一度もう一度と何度も聞き返す日々。聞き取れるようになるのに、とても苦勞した。

受付の電話対応は依頼者と弁護士との大切なパイプである。依頼者の言っていることを正確に弁護士に伝えるのはとても難しい。不安をかかえ連絡してくるため

か、要点がまとまっていないことも多いし、不安に思っていることを止めどなく話す方も多い。そこで事務局は話をきちんと聞き、弁護士に伝えなければならない。時には激怒した相手方からの電話もある。私ではどうしようもないことだが、熱が冷めるまで聞き続ける。法律事務所の電話対応は難しいものだと感じる。

忘れられないエピソード

ある依頼者から、「死んでやる」という電話がかかってきた。あわてて弁護士に電話を繋いだところ、困感気味。聞き耳をたてていると、薬やお酒を大量に飲んでいる様子。電話では埒があかない。弁護士の判断で私はあわてて電車で飛び乗り、依頼者のもとへ。

駅を出て歩いていると、すぐに依頼者を発見。ひとまず公園を歩きながら色々話した。ふとその方の心の寂しさを見た気がした。だんだんと落ち着いてきたようで、娘さんのお宅に帰って行った。数日後、その依頼者は何事もなかったかのように事務所に現れた。

それから2年たったある日、ある女性から「私のこと覚えていますか？」と事務所で声を掛けられた。その方はあの時の娘さんだった。その時依頼者のご病気で亡くなったことを知った。

外回りになって

この4月から外回りになり、裁判所、法務局、都税事務所、区役所など一日中外を飛び回っている。何もかもが初めてで、何処に行くにも地図を片手に持っている。昔から極度の方向音痴の私は、目的地にたどり着くことが一苦勞である。この頃では町ゆく人に平気で道を聞く。神経が太くなったなあつくづく感じる。これから色々な事件に関わるだろう。仕事を通して日々成長していきたいと思う。